

就労準備支援事業における令和3年度の取組

項目	令和2年度評価（成果・課題）	令和3年度の取組計画	令和3年度の実績（令和3年12月末時点）
<p>地域での居場所・役割</p>	<p>【実績】 ・ひきこもり状態にある人の自宅へ定期訪問することで、ドア越しでしか会話ができていなかった方と対面で会話することができた。それ以降の訪問時には、リビングで待っていてくれるようになり、本人の好きなことや興味のあることなど少しずつ視線も合わせてくれながら会話することができた。 ・「寄ってカフェ」を緊急事態宣言発令期間の4月、5月を除き毎月開催し、令和3年の2月、3月からはコロナ禍の影響もありオンラインでの実施を行い延べ18名の利用があった。</p> <p>【評価】 ・ひきこもり状態にある人の支援では、継続的な個別支援を実施することで信頼関係の構築につながった。 ・社会に出るための一歩としての居場所の必要性を再認識することができた。 ・「寄ってカフェ」では、窓口には足を運びにくいという方の相談を受けることができ、相談内容によっては他機関へつなぐきっかけとなり、関係機関と連携する機会が増えた。状況に応じてオンラインでの実施を行い、柔軟に対応することができ、定期的に参加する人たちの交流の場としても活用されている。</p> <p>【課題】 ・「寄ってカフェ」を多くの方に知ってもらうため、周知を継続して行い、周知方法も検討する。 ・ひきこもり状態にある人、その家族が参加しようと思える環境づくり、工夫の必要性を感じる。</p>	<p>【継続】 ・ひきこもり状態や社会的孤立状態、不登校等で地域との関わりが希薄な人たちに対し、アウトリーチを行いながら継続的な個別支援を行う。</p> <p>・「寄ってカフェ」を継続的に実施し、定期的に来てくれる方の居場所として大切にしながら、ひきこもり状態にある人やその家族が参加しやすいように、周知やアウトリーチを行っていく。（オンラインでの実施を含む。）</p> <p>【新規】 ・つどい場「くろまつ」を実施し、定期的集まる場を提供することで、体調を定期的に確認したり、同じ悩みをもつ方たち同士と一緒に作業体験やプログラム参加を通じて交流ができる機会を提供する。（オンラインでの実施を含む。）</p> <p>・地域資源を活用したプログラムを開発し、地域で社会的孤立状態にある人たちを支えていけるようなネットワークづくりに取り組んでいく。</p>	<p>【実績】 ・アサガオ親の会に参加し、不登校、家族のひきこもりに悩む参加者に対して事業説明を行った。その際に、ひきこもり状態の家族についての相談を個別に受け、ひきこもり当事者の了承を得て、自立相談職員と同行し自宅訪問に至った。 ・寄ってカフェの開催も20回を越え、令和3年12月までで延べ20名来店される。 ・つどい場「くろまつ」で「園芸」、「編み物教室」、「体操教室」や参加者に合わせたオーダーメイドのプログラムを実施。</p> <p>【評価】 ・アウトリーチすることで、潜在化している当事者に会うことができた。今後も家族や本人からお話を伺いながらアセスメントを行い、関係性を築きながら関わっていく。 ・寄ってカフェの周知に伴い、既存の周知方法に加えて芦屋市内にある広報板を活用した。前年度に比べ微増した（前年度18名）。 ・定期的に通える場（くろまつ）を設けることで、プログラム提供や他者との関わるの機会をもつことができた。少人数ではあるも居場所としての役割ができているように思う（毎回1～4名ほど参加）。</p> <p>【課題】 ・ひきこもり当事者に関わっていくうえで、丁寧なアセスメントの必要性を改めて認識した。家族の「訪問してほしい」「ずっとこのままではないのか」という気持ちを汲みながらも、ひきこもり当事者の気持ちを第一に考えなくてはいけないと感じた。 その一方で、現在関わっているひきこもりのケースは比較的経済的に余裕のあるご家庭が多いが、困窮状態にある世帯でのひきこもり支援ではより一層行政や自立相談支援事業と連携しながらの関わりが必要であると感じる。 ・困窮状態にある方が、本事業を利用している期間、経済的な基盤がないため、就労への焦りが先行し、プログラムや就労体験に参加する必要性の意識を持ちにくい。 本事業利用者の生活状況を踏まえた支援の工夫が必要だと感じた。</p>
<p>周知・啓発</p>	<p>【実績】 ・自立相談支援事業と近隣の高校・大学へ訪問し、学校側に本事業の対象者像や支援内容の説明を年度内に2回行い、本事業を認知してもらうことに努めた。 ・民生児童委員協議会定例会で「寄ってカフェ」の概要説明や本事業の研修会を開催した。その結果、実際に民生委員・児童委員からチラシを受け取った方が相談に来られた。</p> <p>【評価】 ・学校訪問することで、学校だけでは対応できないニーズについて知ることができ、学校とつながりをもつことができた。 ・周知・啓発することで相談に来てくれる人がいる事がわかり、アウトリーチの必要性を再認識した。</p> <p>【課題】 ・学校訪問で知ることができたニーズに対して本事業としてどのように関わっていくか検討する。 ・リーフレットを事業内容がわかりやすくなるようリニューアルしたが、具体的にどのような支援ができるのかを掲載し、よりわかりやすいものに改定する必要があると考えている。</p>	<p>【継続】 ・近隣の高校・大学と情報共有や学校訪問を通じて事業を周知し、先生や学生の方と関わりや接点をもつ機会をつくる。</p> <p>・総合相談窓口や関係機関との連携を強化し、潜在的な対象者の把握に努める。</p> <p>・民生児童委員協議会や各関係機関への周知活動を継続して行っていく。</p> <p>・リーフレットを支援内容や流れがより分かりやすいものに改定し、配布する。</p> <p>【新規】 ホームページ等を活用しながら、本事業がどういった内容なのかイメージを持ってもらいやすいように発信していく。</p>	<p>【実績】 ・自立相談支援事業と近隣の高校・大学へ訪問し、学校側に本事業の対象者像や支援内容の説明を行い、本事業を認知してもらうことに務めた。 また、クローバー芦屋とも連携し近隣の高校に事業説明や今後の連携についての提案を行った。継続して事業説明を学校側に行ってきたことで、高校の教諭から卒業生についての相談があり、本事業利用につながった。 ・総合相談窓口や関係機関との連携を強化し、潜在的な対象者の把握やアプローチについて共有することができ、本事業利用者の増加につながった。 ・リーフレットの裏面を利用して、支援の流れや内容について記載した。法人のホームページに本事業についてのページを作成した。</p> <p>【評価】 ・継続的に学校訪問することで、本事業について認知してもらうことができ、学校とどのように連携していくか一緒に考えていく機会となった。 ・関係機関と連携することで、対象者のニーズを知ることができ、地域資源をどのように活用していけば良いかを自立相談支援事業と連携、相談しながらすすめることができた。</p> <p>【課題】 ・法人ホームページに本事業について掲載しているので、今後の取り組みや予定について周知できるように活用していきたい。</p>

項目	令和2年度評価（成果・課題）	令和3年度の取組計画	令和3年度の実績（令和3年12月末時点）
就労支援	<p>【実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本事業利用者に対して就労体験，応募企業研究，面接対策，履歴書作成等の支援を行い，3ケース，アルバイト就労につながった。 ・社会資源の開拓を行い，ボランティアや見学，実習の受け入れ協力先として，3企業と協定を結んだ。 ・令和2年，12月，令和3年1月，2月にオンライン面接練習・就労サロンは令和2年12月以降はオンラインで実施した。 <p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会資源の開拓だけでなく本事業利用者のニーズに応じて，就労体験，ボランティアへの参加などを活用することができ，就労体験先への就労にもつながった。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，オンラインを活用した支援が増えた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインを通して，コロナ禍でも社会資源の活用を行いつながりを広げていく必要性を感じる。 ・就労サロン，グループセッション等の「働く」ことに対してだけでなく「好きなこと」に着目してプログラムの活用を行う必要がある。参加者の自己理解へのきっかけづくりの場としていきたい。 	<p>【継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阪神南障害者就業・生活支援センターと協働で就労グループセッションを実施する。（オンラインでの実施含む。） ・在職者交流活動「就労サロン」を実施する。（オンラインでの実施含む。） ・対象者のニーズに合わせてボランティア体験や就労体験先を開拓する。 <p>【新規】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就労準備支援事業評価指標（KPSビジュアルイズツール）を活用し，対象者の現在の状況を数値化し支援に活用する。 	<p>【実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阪神南障害者就業・生活支援センターと協働で実施している就労グループセッションに本事業利用者が参加した。 ・就労体験，ボランティア体験先を4件開拓した。就労体験の実施には至らなかったが，保健福祉センターの花の植え替え作業に参加したり，芦屋市社会福祉協議会の赤い羽根募金の準備作業を一緒に行った。 ・就労準備支援事業評価指標を活用し，本事業利用者の状況を数値化し，本人と振り返ることができた。 <p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本事業利用者が就労グループセッションに参加し，就職に向けての取り組みについて学ぶ機会となった。 ・他機関と協働しながら本事業利用者が，他者と関わる場面や作業面でのアセスメントの機会となった。 ・就労準備支援事業評価指標をプログラムや定期的な現状の確認のため活用を予定していたが，本事業利用者の状況によって不定期になってしまうことがあった。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本事業利用者のニーズに合わせた就労体験先の開拓や既存の体験先での実施を継続して行っていきたい。
相談支援体制の機能強化	<p>【実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立相談支援機関の支援対象者に対して，初期段階から面談に入ることによって本事業の理解が得られたことや，若者相談センターアサガオの紹介もあり5件が本事業の利用につながった。（継続1件，新規4件） ・自立相談支援機関担当者として11月から可能な範囲で，週に1回打ち合わせを行い，月に1回の定例支援調整会議にも出席することで，個別ケースについてより詳しく情報共有ができた。 ・他市の就労準備支援事業担当者と面談し，取り組みを見学し内容を聞き取った。 <p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立相談支援機関担当者との打ち合わせ回数が増えたことで，個々のケースについて早期介入，共有ができた。 ・コロナ禍で就業支援団体連絡会がない中，個別に他市の就労準備支援事業担当者を訪問し，情報収集に努めることができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「阪神南障害者就業・生活支援センター」につなぐ必要のある相談者について，障がい受容の有無により，本事業での関わり方について検討が必要である。 ・他市の就労準備支援事業の取り組みを調査していく中で，本市で取り入れられるものについて検討，精査していく必要がある。 	<p>【継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他市の就労準備支援事業の取組内容を調査し，取り入れられるものは支援に活かしていく。 ・自立相談支援事業の定期的な打ち合わせ，定例支援調整会議，事例検討会へ参加し情報共有を行う。 ・自立相談支援事業で就労を課題とする方には早期から介入し，就労支援を実施する。 ・『阪神南障害者就業・生活支援センター』への就労相談のうち，障がい者手帳を所持していない相談者と面談を行い，ニーズの把握に努める。 <p>【新規】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携している他機関がつなぎやすいように，対象者が本事業を活用することの意義について提供できるプログラム等を通して周知していく。 	<p>【実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他市の就労準備支援事業の取り組み内容を調査し，プログラム内容や就労体験先や事業利用者についての情報を得ることができた。また芦屋市の取り組みについても伝えながら相互の情報共有となった。 ・自立相談支援事業との定期的な打ち合わせや情報共有を行い，就労を課題とする方の早期の介入を継続して行うことで本事業利用者の増加につながった。 <p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立相談支援機関と継続して綿密に連携，早期からの面談の同席，定期的な打ち合わせにより情報の共有に努めることができた。 ・就労相談のうち，障がい者手帳を所持しておらず，日中活動の場がない方に対してつどい場「くろまつ」を通して参加の場の提供ができた。 ・また，手帳を所持している方で日中活動の場がない方の参加の場の機会となった。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携している他機関がつなぎやすいように，本事業のプログラムや内容について継続して周知しながら連携をさらに強化していきたい。